草津温泉の近代ー地域形成史とイメージの変遷

関戸明子（群馬大学）　2022年11月21日　健康と温泉フォーラム第102回月例研究会

明治初期における入浴客数の多い温泉地

名称	所在地	入浴客数
道後	愛媛県松山市	721, 721
柄崎（武雄）	佐賀県武雄市	290, 400
山鹿	熊本県山鹿市	95, 046
下浅間＋上浅間（浅間）	長野県松本市	71, 696
福山宮ノ脇	鹿児島県霧島市	69, 250
渋湯	長野県山ノ内町	52, 287
武藏（二日市）	福岡県筑紫野市	50, 000
院内＋大湯（別所）	長野県上田市	47, 635
福山宮ノ下	鹿児島県霧島市	46, 815
白絲（美ヶ原）	長野県松本市	44, 476
湯田	山口県山口市	43, 787
硫黄谷	鹿児島県霧島市	40, 627
古湯	佐賀県佐賀市	40, 000
関屋	新潟県新潟市	38, 535
山田	富山県富山市	35, 666
嬉野	佐賀県嬉野市	35, 000
熱海	静岡県熱海市	34, 368
湯本	山口県長門市	31, 600
岩井	鳥取県岩美町	31, 200
塩浸	鹿児島県霧島市	27, 846
湊山	兵庫県神戸市	27, 640
湯田中	長野県山ノ内町	25, 540
伊香保	群馬県渋川市	24, 883
松寺	石川県金沢市	24, 812
草津	群馬県草津町	24, 150
別府＋浜脇	大分県別府市	21, 970
湯本	神奈川県箱根町	21, 600
諏訪山	兵庫県神戸市	21, 333
下部	山梨県身延町	20, 456
湯ノ浦（吹上）	鹿児島県日置市	19, 880

内務省衛生局(1886)『日本鉱泉誌』より作成

1878(明治11年)から２～３年の平均。
一部，1876(明治９年)や1881(明治14)年などからの期間を含む。

大正期における入浴客数の多い温泉地

名称	所在地	入浴客数
道後温泉	愛媛県松山市	1, 030, 237
城崎温泉	兵庫県豊岡市	1, 007, 175
別府温泉	大分県別府市	778, 799
山鹿温泉	熊本県山鹿市	683, 220
武雄温泉	佐賀県武雄市	433, 371
山口町湯田温泉	山口県山口市	306, 340
城端ラジウム鉱泉	富山県南砺市	260, 411
湯村温鉱泉	兵庫県新温泉町	255, 172
食塩亜皃加里性炭酸泉（宝塚）	兵庫県宝塚市	231, 773
伊香保温泉	群馬県渋川市	227, 064
湊山温泉	兵庫県神戸市	199, 916
湯原温泉	岡山県真庭市	197, 747
熱海温泉	静岡県熱海市	165, 085
吉方温泉	鳥取県鳥取市	164, 050
日奈久温泉	熊本県八代市	163, 919
鯉ノ湯（熊入）	熊本県山鹿市	157, 500
伊作温泉（吹上）	鹿児島県日置市	145, 568
温海温泉	山形県鶴岡市	143, 442
山中温泉	石川県加賀市	140, 194
塩原温泉	栃木県那須塩原市	139, 138
第二芳乃湯	山梨県甲府市	133, 099
鶴脛温泉(上山)	山形県上山市	128, 408
鳴子温泉	宮城県大崎市	127, 536
鷺温泉（湯郷）	岡山県美作市	123, 090
湯ノ川温泉	北海道函館市	121, 000
那須温泉	栃木県那須町	119, 541
修善寺温泉	静岡県伊豆市	118, 036
浅間温泉	長野県松本市	113, 955
岩崎温泉	鹿児島県鹿児島市	113, 566
登別温泉	北海道登別市	111, 806

草津

内務省衛生局(1923)『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』より作成

1911(明治44)年から1920(大正９)年の10年間の平均。
新設のものは単年または数年の数値がとられている。
草津は7, 118人と過小に報告されている。『群馬県統計書』で1913～1920年の平均を求めると，149, 577人となる。

1939(昭和14)年における入浴客数の多い温泉地

名称	所在地	入浴客数
山鹿	熊本県山鹿市	2, 282, 854
城崎	兵庫県豊岡市	1, 774, 930
道後	愛媛県松山市	1, 597, 899
下諏訪	長野県下諏訪町	1, 384, 409
別府	大分県別府市	1, 011, 339
湯田	山口県山口市	903, 000
熱海	静岡県熱海市	474, 657
上諏訪	長野県諏訪市	426, 569
嬉野	佐賀県嬉野市	400, 000
伊東	静岡県伊東市	379, 849
東莱	韓国慶尚南道	378, 000
温陽	韓国忠清南道	352, 048
宝塚	兵庫県宝塚市	339, 022
草津	群馬県草津町	315, 759
湯河原	神奈川県湯河原町	304, 663
登別	北海道登別市	256, 436
市比野	鹿児島県薩摩川内市	247, 720
浅虫	青森県青森市	240, 961
伊香保	群馬県渋川市	238, 393
東山	福島県会津若松市	221, 130
山中	石川県加賀市	218, 102
長岡	静岡県伊豆の国市	217, 000
芦原	福井県あわら市	210, 096
塩原	栃木県那須塩原市	206, 348
甲府	山梨県甲府市	200, 000
四万	群馬県中之条町	193, 313
船小屋	福岡県筑後市	189, 526
片山津	石川県加賀市	189, 358
杖立	熊本県小国町	180, 294
川棚	山口県下関市	175, 520

日本温泉協会(1941)『日本温泉大鑑』より作成

日本温泉協会に加盟し，入浴客数を届けた温泉地のみ。
日光湯元（457, 675人）と平岩（306, 000人）は，収容数から誤記であると判断して除外。

図表などの無断転載を禁止します

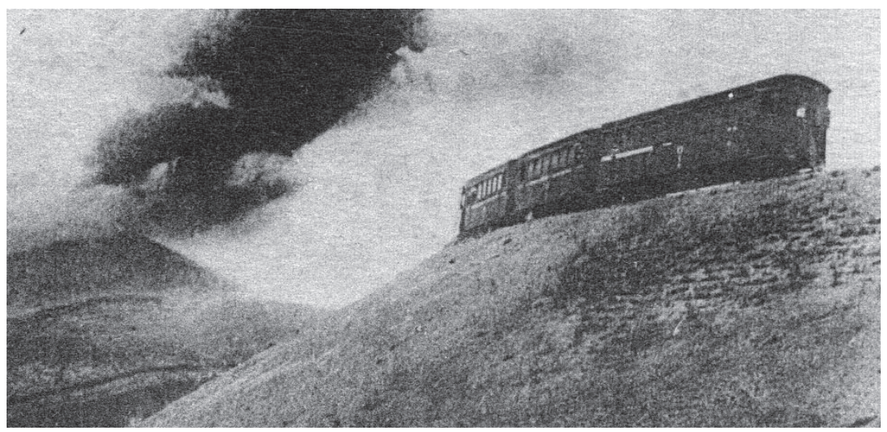
草津温泉への行程の変化

1895／明治28年	高崎駅／前橋駅-馬車軌道-渋川-馬車・人力車31km-沢渡温泉-駕籠24km
	軽井沢駅-人力車-沓掛-馬35km
1907／明治40年	高崎駅／前橋駅-馬車軌道-渋川-人力車55km
	軽井沢駅-沓掛-応桑-羽根尾-人力車・駕籠・馬39km
	豊野駅-馬車-中野-渋温泉-駕籠27km
1923／大正12年	軽井沢駅-草津軽便鉄道-嬬恋-馬・駕籠12km
	中之条-長野原-馬・徒歩39km
	中之条-沢渡温泉-馬・徒歩35km
	渋温泉-馬・徒歩27km
1927／昭和2年	軽井沢駅-草津電気鉄道-草津温泉駅
1931／昭和6年	軽井沢駅-草津電気鉄道，2.76円-草津温泉駅-自動車0.15円
	軽井沢駅-直通自動車3円，ハイヤー20円
	渋川駅-自動車3.40円，ハイヤー25円
1940／昭和15年	渋川駅-省営バス1.65円
	軽井沢駅-草軽電気鉄道2円-草津温泉駅-バス0.30円
	軽井沢駅-バス1.50円，貸切自動車20円

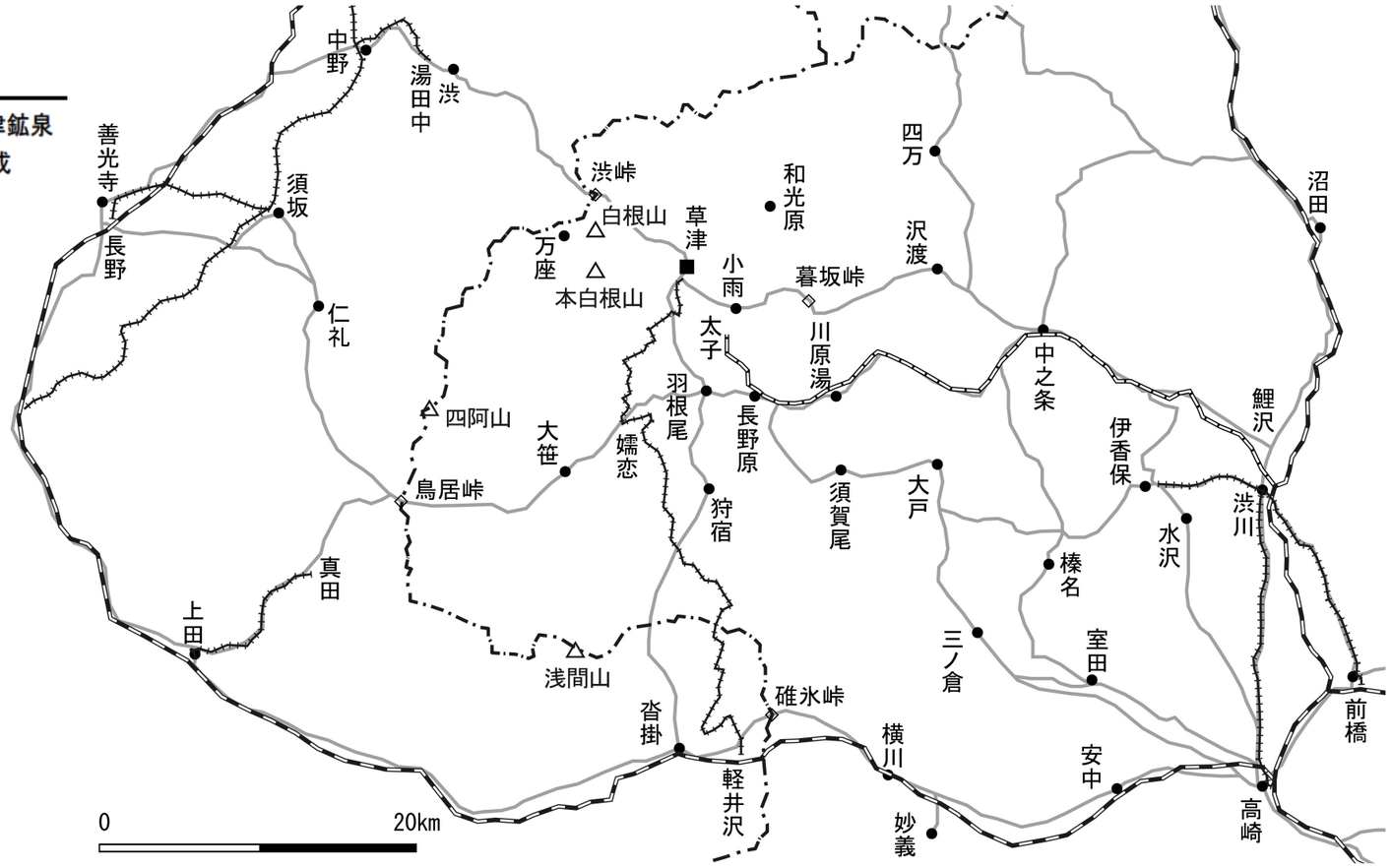
原典には里が用いられているがkmに換算した。1895年:『上州草津温泉入浴略案内記』，1907年:『草津鉱泉療法』，1923年:『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』，1927年・1931年・1940年:鉄道省『温泉案内』より作成

絵はがき「湯の花採取場（湯畑）」部分
iv期:1933-45

省営バスで帰郷する客を見送る人びと
東京鉄道局『省線自動車吾妻線案内』1935年



絵はがき「上州草津高原鉄道　鶴溜附近線路ヨリ浅間遠望」部分
iii期:1918-33



昭和初期の草津温泉周辺の主要道路と鉄道

鳥瞰図の案内情報と描写内容の変化

No	名称	発行年		由来	効能	成分	番付	里程	八景	電線	街灯	宿名	名所	乗物
1	上州草津温泉大図	1810	文化７	○	△	×	×	○	×	×	×	×	8	馬
2	上州草津温泉図	1812	文化９	○	△	×	×	○	×	×	×	×	8	馬
3	上州草津温泉図	1821	文政４	×	×	×	×	×	×	×	×	×	8	馬・駕籠
4	上州草津温泉之図	1825	文政８	○	△	×	×	○	○	×	×	×	8	馬
5	上州草津温泉略図	1827	文政10	○	×	×	×	○	×	×	×	×	7	馬
6	上州草津温泉の図	1840?	天保11?	×	△	×	×	○	×	×	×	×	7	馬・駕籠
7	上州草津温泉之図	1853	嘉永６	○	×	×	×	○	×	×	×	×	8	馬
8	上州草津温泉之図	1855	安政２	×	×	×	×	○	×	×	×	×	8	馬
9	上州草津温泉之図	1856	安政３	○	△	×	×	○	×	×	×	×	8	馬
10	上州草津温泉之図	1859	安政６	×	×	×	×	×	×	×	×	×	8	馬
11	上州草津温泉之全図	1879	明治12	×	×	×	×	×	×	×	×	×	7	馬・駕籠
12	上州草津温泉図并八景	1879	明治12	×	×	×	×	×	○	×	×	×	6	－
13	上州草津温泉之略図	1880	明治13	○	×	○	×	×	×	×	×	×	7	駕籠・人力車
14	上州草津温泉之全図	1881	明治14	○	○	×	×	○	×	×	×	×	5	駕籠
15	上州草津温泉図并八景	1884	明治17	×	○	×	×	○	○	×	×	×	6	－
16	上州草津温泉之全図	1885	明治18	×	×	×	×	×	×	×	×	×	7	馬・駕籠
17	草津鉱泉場之図	1885	明治18	×	○	○	×	×	×	×	×	×	2	駕籠・人力車
18	上州草津温泉之全図	1887	明治20	○	○	×	×	×	×	×	×	×	5	－
19	上州草津鉱泉全図	1887	明治20	○	○	○	○	○	×	×	×	×	3	人力車
20	草津鉱泉場之図	1888	明治21	×	○	○	×	×	×	×	×	×	2	駕籠・人力車
21	上州草津温泉之全図	1888	明治21	○	○	×	×	○	×	×	×	×	5	馬・駕籠
22	上州草津鉱泉全図	1889	明治22	×	○	○	×	×	×	×	×	×	4	人力車
23	上州草津温泉図	1890	明治23	○	○	×	○	×	○	×	×	×	7	馬・人力車
24	上州草津温泉図	1891	明治24	○	○	×	○	○	○	×	×	×	6	人力車
25	草津鉱泉場之図	1891	明治24	×	○	○	×	×	×	×	×	×	2	駕籠・人力車
26	上州草津温泉図	1892	明治25	○	○	×	○	×	○	×	×	×	7	馬・人力車
27	上州草津鉱泉全図	1893	明治26	○	○	○	○	○	×	×	×	×	5	人力車
28	上州草津温泉図	1893	明治26	○	○	×	○	×	○	×	×	×	7	馬・人力車
29	上州草津温泉図	1896	明治29	○	○	×	○	×	○	×	×	×	7	馬・人力車
30	上州草津温泉全図	1896	明治29	○	○	○	○	○	×	×	×	×	5	人力車
31	上州草津温泉場真図	1897	明治30	○	×	○	×	×	×	○	○	×	3	駕籠・人力車
32	上州草津温泉全図	1898	明治31	○	○	×	○	○	×	×	×	×	5	人力車
33	上州草津温泉場略図	1903	明治36	○	○	×	×	○	×	○	○	○	5	馬・人力車
34	上州草津温泉場略図	1905	明治38	×	○	×	×	×	×	○	○	○	5	馬車
35	上州草津温泉略図	1908	明治41	○	×	×	○	○	×	○	×	×	4	人力車
36	上州草津温泉真景図	1909	明治42	○	○	×	×	○	×	×	○	○	2	馬・人力車
37	上州草津温泉真景図	1914	大正３	○	○	○	×	○	×	○	○	○	1	馬・人力車
38	上州草津温泉真景図	1914	大正３	○	○	×	×	○	×	×	×	○	3	馬車・人力車
39	上州草津温泉真景図	1916	大正５	○	○	○	×	○	×	○	○	○	1	人力車
40	上州草津温泉真景図	1917	大正６	○	○	○	×	○	×	○	○	○	1	自動車・人力車
41	上州草津温泉真景図	1920	大正９	×	○	×	×	×	×	○	×	○	3	自動車・馬車・馬・人力車
42	上州草津温泉真景図	1920	大正９	○	○	○	×	○	×	○	○	○	1	自動車・馬・人力車
43	上州草津温泉真景図	1922	大正11	○	○	○	×	○	×	○	○	○	1	自動車・自転車・馬・人力車
44	上州草津温泉案内図	1926	大正15	×	○	○	×	×	×	○	○	○	2	馬・人力車
45	上州草津温泉真図	1932	昭和７	×	×	×	×	○	×	×	○	○	5	自動車
46	上州草津温泉鳥瞰図	1938	昭和13	×	○	○	×	○	×	×	○	○	5	自動車

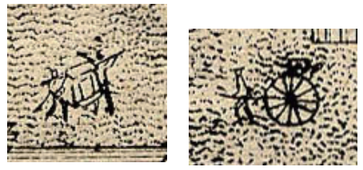
注）効能を別枠でなく図絵の中に記載するものに△を付した。名所とは近世以来の「常布の滝，氷谷，殺生河原，西の河原，鬼の茶釜，鬼の角力場，木の葉石，ゆるぎ石」のうち，いくつ示されているかを数えた。

1856 年

1879 年

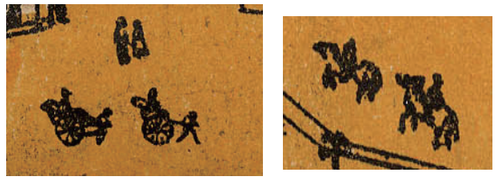
1885 年

1888 年

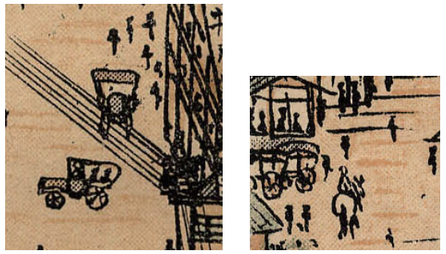


1905 年

1914 年

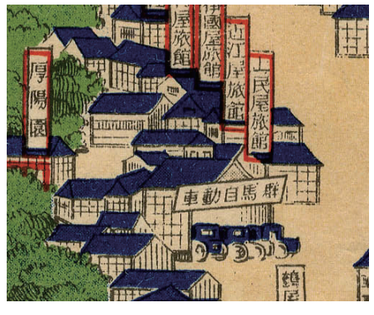


1920 年

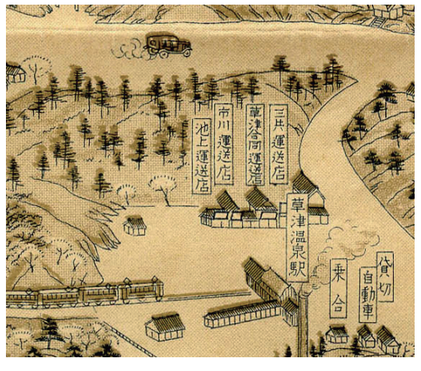


1926 年

1932 年



1938 年



明治後期における草津（1910 年）

A: 瀧の湯, B: 白旗の湯, C: 熱の湯
D: 鷲の湯, G: 地蔵の湯, H: 琴平湯, I: 煮川の湯
J: 松の湯, K: 千代の湯, L: 瑠璃の湯, O: 凪の湯, Q: 関の湯

明治後期における旅館と共同浴場の分布（1910 年）

丸数字は表の旅館番号に対応。「吾妻郡草津町郷土誌」付図より作成

「上州草津温泉場略図」(1905 年) に描かれた共同浴場と旅館

A: 瀧の湯, B: 白旗の湯, C: 熱の湯, D: 鷲の湯, E: 綿の湯, F: 脚気の湯
G: 地蔵の湯, H: 金刀比羅滝, I: 煮川の湯, J: 松の湯, K: 千代の湯
M: 玉の湯, N: 富の湯, P: 新御座の湯, Q: 関の湯
丸数字は表の旅館番号に対応
a: 山本館本多, b: 月の井, c: 一田屋, d: 福栄館, e: 桐山二平

表　明治後期における旅館の一覧（1911年）

等級	No.	宿名	経営者
一等	1	大東館	山本与平次
	2	長養館（大坂屋）	中沢市郎次
	3	望雲館	黒岩忠四郎
	4	白根ホテル	黒岩誠一郎
	5	山本館本館	黒岩誠一郎
	6	一井館	市川善三郎
	7	日新館	湯本柳三郎
二等	8	凱旗館	新納伊三郎
	9	常磐館	宮崎武八郎
	10	養寿館	萩原国三郎
	11	桐山館	神林喜平
	12	山本館	小林豊吉
	13	山幸	山口幸八郎
三等	14	大津屋	山口栄太郎
	15	古久長	小林長蔵
	16	大屋	山本佐五郎
	17	遠州屋	黒岩定次郎
	18	ての字	湯本清曹
	19	松盛館	富永七郎
四等		12軒	
五等		15軒	
六等		12軒	

萩原太一郎『草津温泉』増補再版，1911年による

草津温泉の主な共同浴場の変遷

	No.1	No.4	No. X	No.7	No.10	①	No.11	②	No.17	No.18	No.20	No.22	No.31	No.33	No.36	③	No.37	④	No.45	⑤	No.46
刊行年	1810	1825	1829	1853	1859	1873	1879	1880	1885	1887	1888	1889	1897	1903	1909	1910	1914	1923	1932	1936	1938
薬師滝・天狗滝・不動滝	○	○	○	○	○	A1	○		○	○	○	○									
大瀧の湯／瀧の湯						A2		○					○	○	○	A	○	○	○	○	○
御座の湯→白旗の湯	○	○	○	○	○	B	○	○	○	○	△	●	●	●	●	B	●	●	●	●	●
熱の湯	○	○	○	○	○	C	○	○	○	○	○	○	○	○	○	C	○	○	○	○	○
鷲の湯	○	○	○	○	○	D	○	○	○	○	○	○	○	○	○	D	○	○	○	○	○
綿の湯	○	○	○	○	○	E	○	○	○	○	○	○	○	○	○						
脚気の湯	○	○	○	○	○	F	○	○	○	○	○	○	○	○							
地蔵の湯	○	○	○	○	○	G	○	○	○	○	○	○	○	○	○	G	○	○	○	○	○
滝湯／琴平滝／琴平湯	○	○	○		○	H	○	○	○	○	○	○	○	○	○	H	○				
煮川の湯		○	○	○	○	I	○	○	○	○	○	○	○	○	○	I	○	○	○	○	○
松の湯			△	○	○	J	○	○	○	○	○	○	○	○	○	J	○	○	○	○	○
千代の湯			△	○	○	K	○	○	○	○	△	○	○		○	K	○	○	○	○	○
瑠璃の湯			△	○	○	L	○	○	○	○	○	○				L		○	○	○	○
玉の湯			△	○	○	M	○	○	○	○	○	○	○	○	○						
白寿の湯				○	○		△		○	○	○	○	○								
富の湯				○	○	N	○	○	○	○	○	○	○	○	○						
凪の湯				○	○	O	○	○	○	○	○	○	△			O		○		○	
関の湯									○		○		○			Q		○		○	
新御座の湯						P					○	○	○	○	△					＊	

図番号は関戸（2012）による。前後で変化がない図の情報は省略した。△：浴場の建物があるが文字注記を欠く。●：名称の変更。

① 「草津村壬申地券字引絵図」。A1は「不動瀧」，Ｈは「泉水瀧湯」，Ｐは「籬の湯」となっている。

② 折田佐吉『草津温泉の古々路恵』折田佐吉

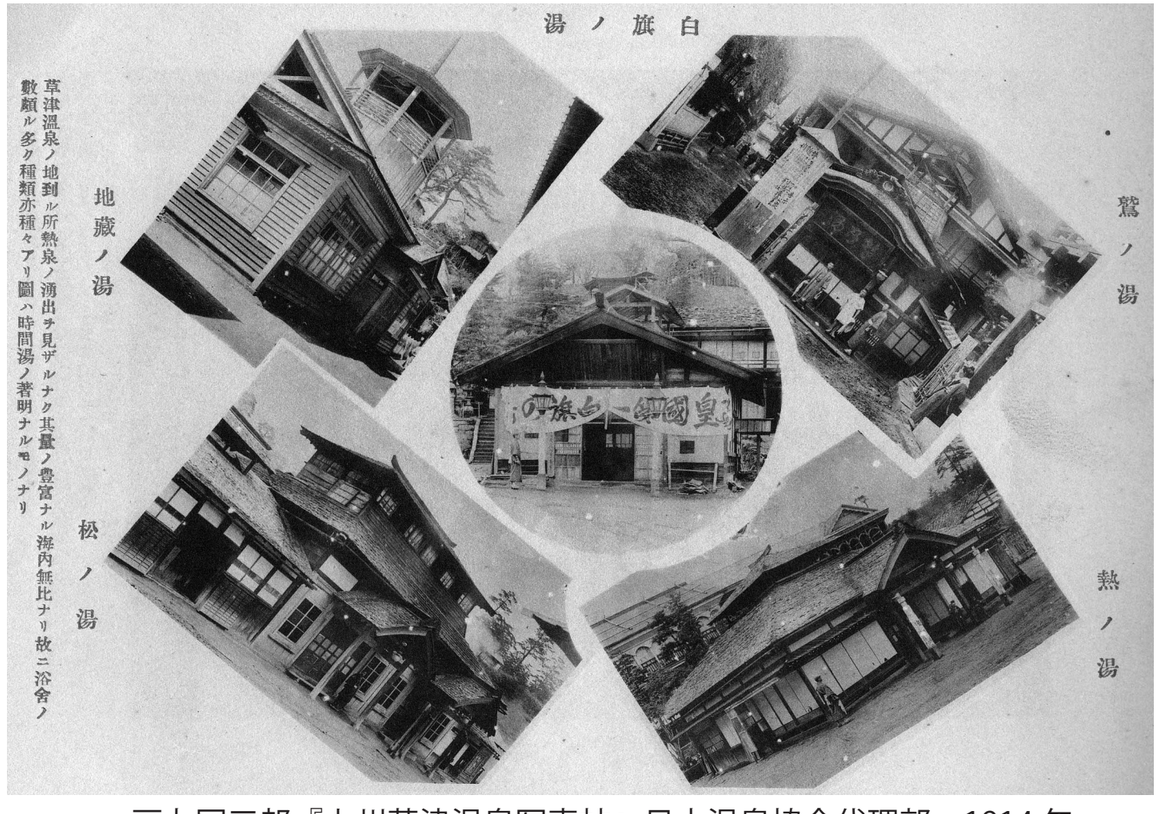
③ 草津尋常高等小学校・草津町役場「吾妻郡草津町郷土誌」付図。

④ 布施廣雄『草津温泉案内』草津鉱泉取締所。アミは時間湯を行う浴場。

⑤ 中村舜二『天下の草津温泉』大東京社。アミは時間湯を行う浴場。＊：御座の湯・籬の湯・桜の湯の３湯

絵はがき「時間湯熱之湯外部」（ii 期 :1907-18）

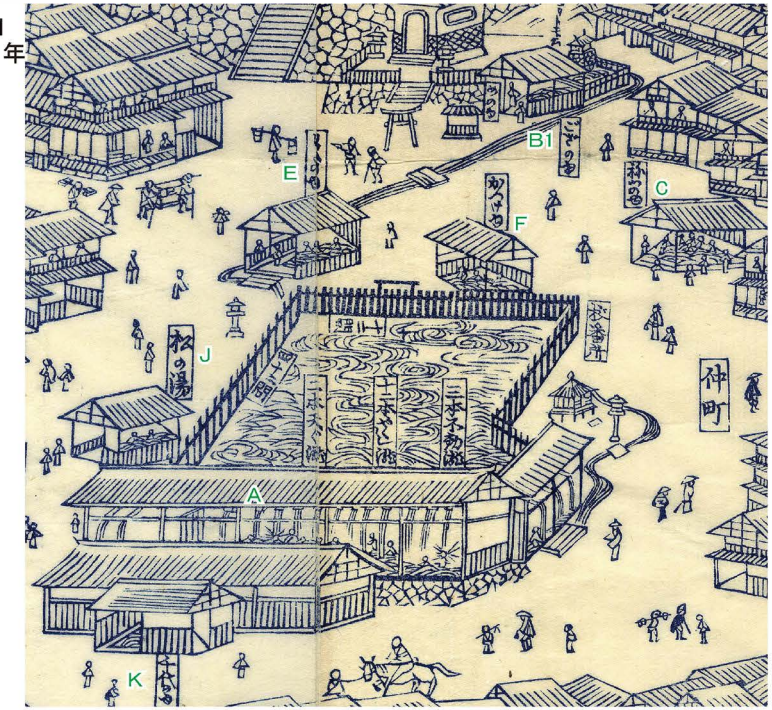
熱の湯 (上) と松の湯 (下) の変化　左はiii期 :1918-33，右はiv期 :1933-45



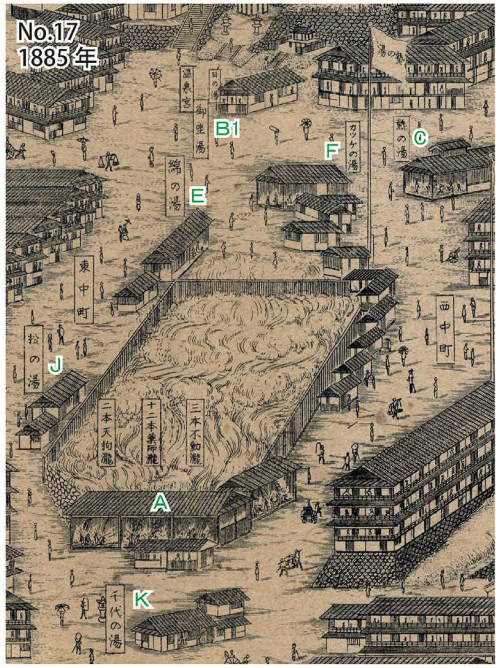
戸丸国三郎『上州草津温泉写真帖』日本温泉協会代理部，1914 年

鳥瞰図に描かれた湯畑周辺の変化

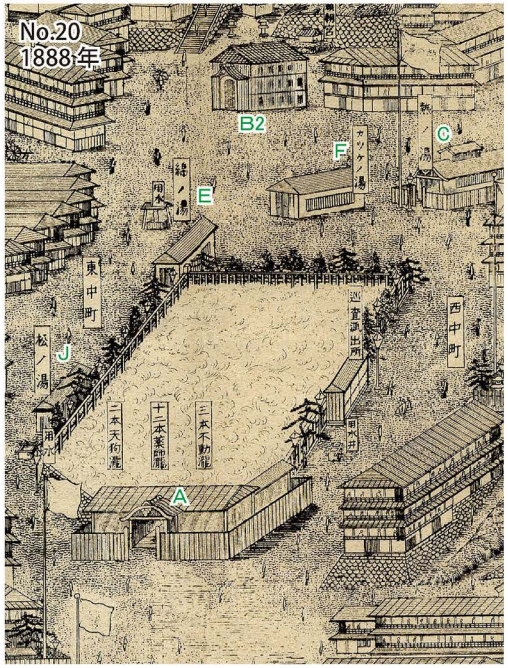
No.11
1879 年



No.17
1885 年



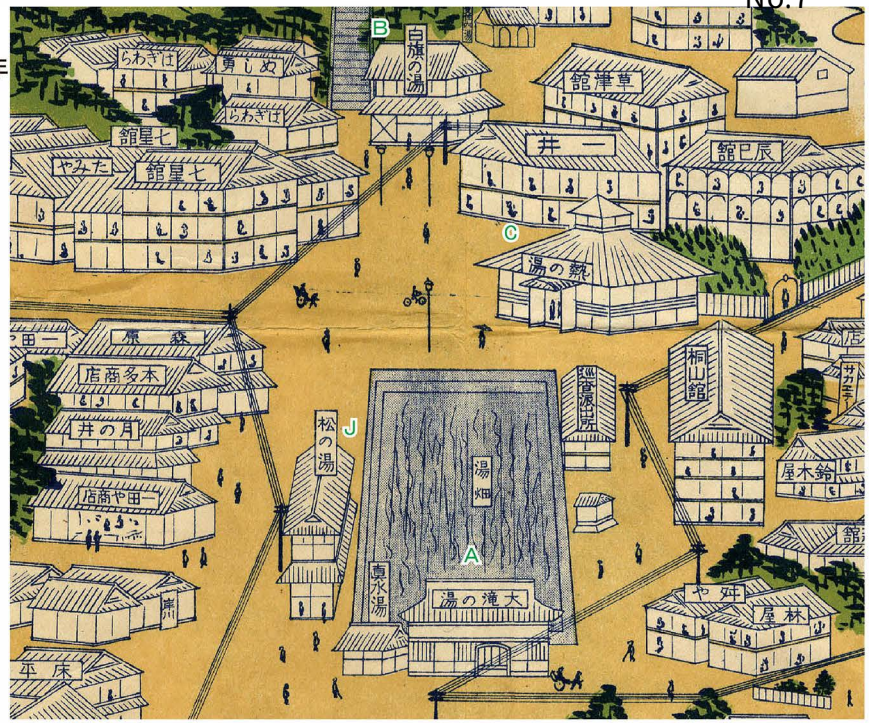
No.20
1888 年



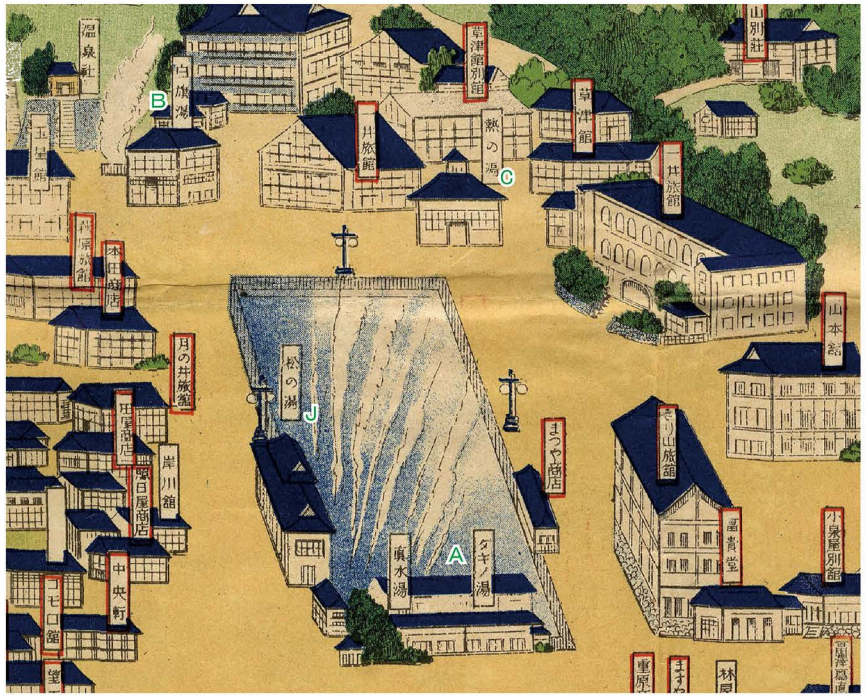
A：瀧の湯, B1：御座の湯, B2：白旗の湯, C：熱の湯, E：綿の湯, F：脚気の湯, J：松の湯, K：千代の湯

No.7

No.43
1922 年

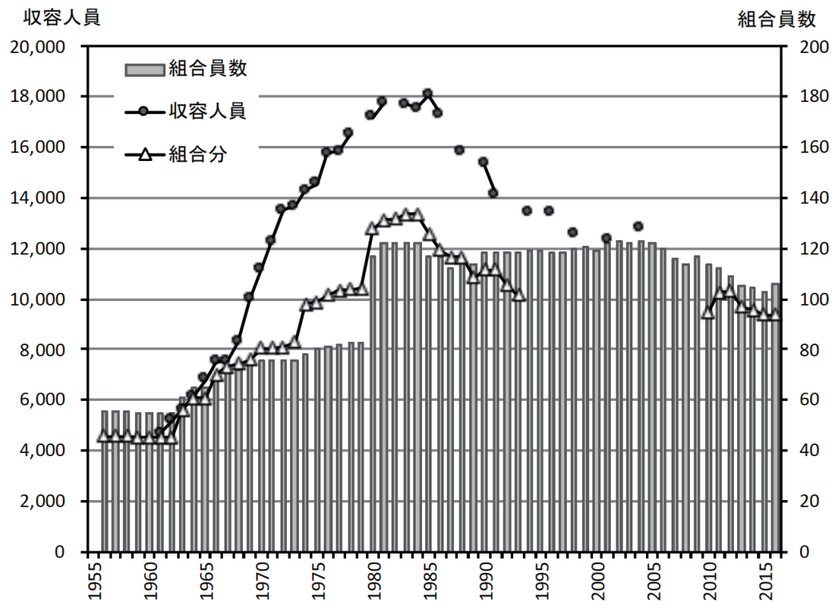


No.45
1932 年



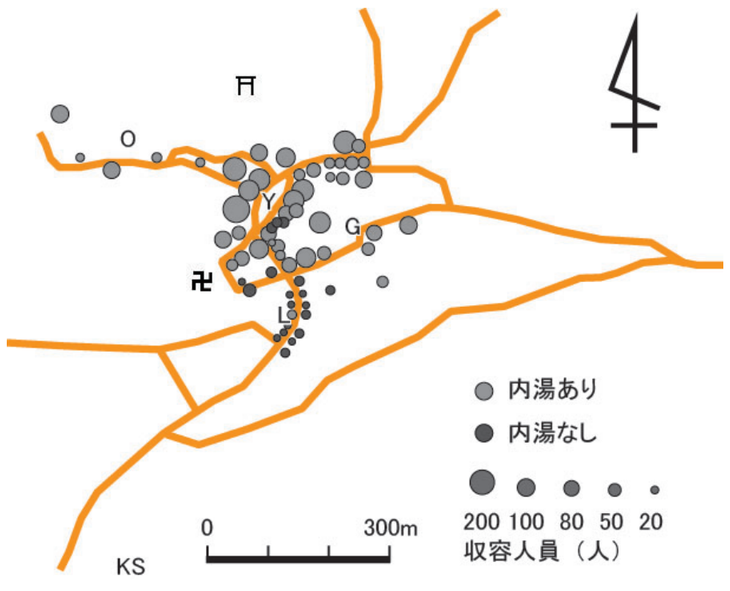
A：瀧の湯, B：白旗の湯, C：熱の湯, J：松の湯

草津の宿泊施設の立地展開



宿泊施設の収容人員の推移

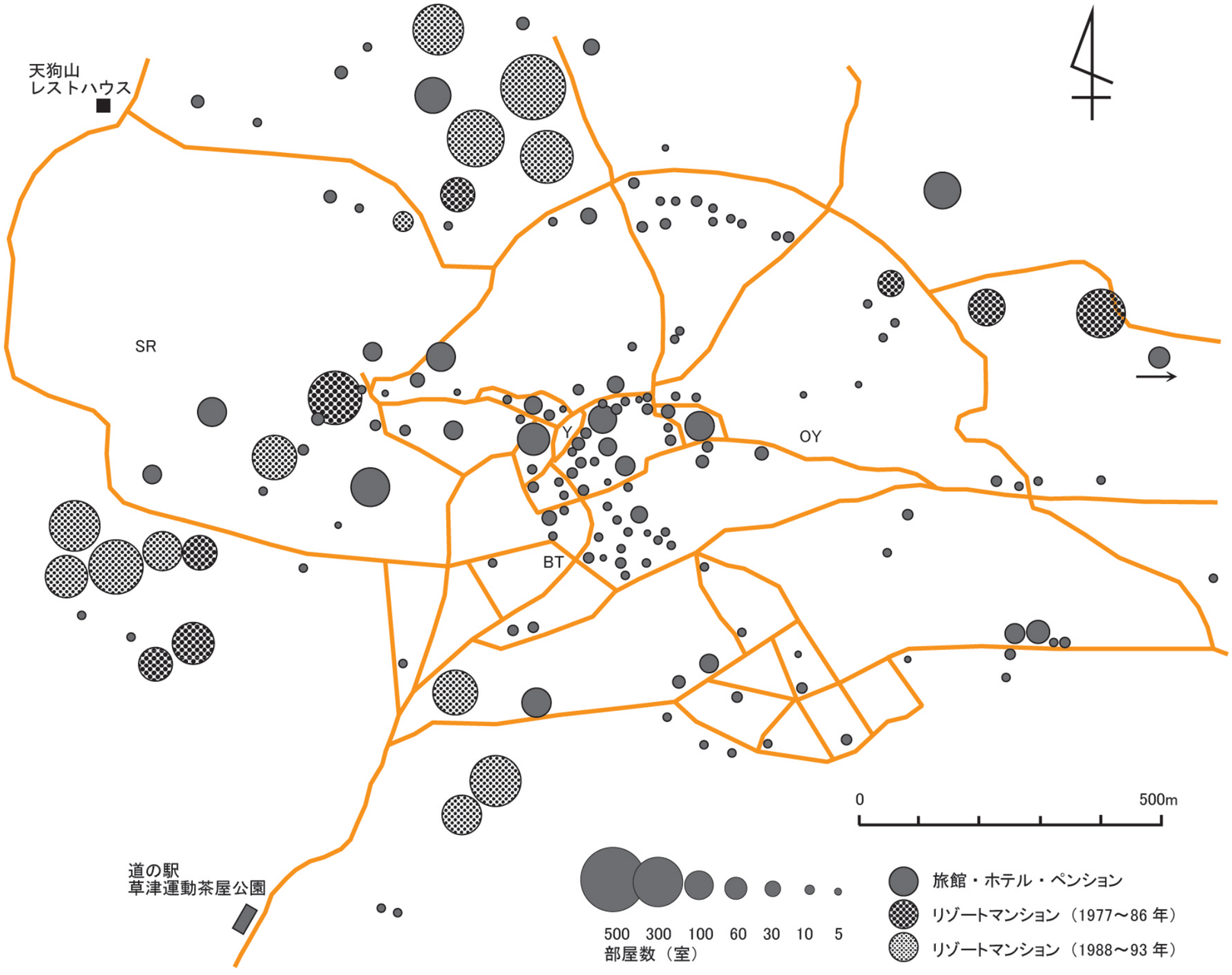
「草津町観光要覧」「総合計画」，
草津温泉旅館協同組合資料より作成



昭和初期における旅館の分布（1940 年）

Y：湯畑　G：地蔵湯　O：凪の湯　L：瑠璃の湯　KS：草津温泉駅

『日本温泉大鑑』の一覧をもとに各種鳥瞰図等で位置を確認して作成



宿泊施設とリゾートマンションの分布（2016 年）

Y：湯畑　OY：大滝乃湯　SR：西の河原露天風呂　BT：バスターミナル

草津温泉旅館協同組合資料，大手宿泊検索サイト，草津町役場資料より作成

大槻文彦（一八四七～一九二八）一八七九（明治一二）年九月訪問

大槻文彦「上毛温泉遊記」『復軒旅日記』冨山房、二～三二頁、一九三八年

市中の湯場凡一八処ありて、一市の家皆硫烟の中にあり、凡器物の銀銅鉄類の物は皆腐蝕す。（略）皆路旁に就きて浴場を造りかけたれば路行く人に見透かさるるなり。（略）御座の湯は専癩病に効ありとし、浴者は皆其患者なり。（略）瀧の湯は市街の中央に東西四十余間、南北十余間なる浅き湯池ありて湯垣（ゆがき）とて垣を繞ぐらし、其内熱湯一面に沸き出で湯の烟空を覆ひて物凄く、その池の東一方一丈許、俄に低く湯の落つる処に長屋造の浴場ありて筧にて十余の湯瀧とす。是瀧の湯なり。天狗の瀧何某の瀧など名あり。逆上に宜しなどといへり。脚気の湯は専、其患者のみ入る。皆足のみ浸す。温まる湯なりと云。鷲の湯は其熱さ、熱の湯に次ぐ。和（なぎ）の湯は半は水交りて効なしとて、一遊の旅人のみ入るなり。（略）熱の湯は特に浴法ありて、其の状実に人をして胆を寒からしむ。（略）其の浴するの熱度は華氏百廿五度なり［筆者注、五一・七℃］、（略）此の湯は殊に梅毒に効ありとし、浴する者は大抵経久痼疾に陥りし者にて皆此熱湯に病を投ずるは死ぬると癒ゆるとの両途なりと決心し、実に此の熱に死ぬる者往々ありといへり。近年県庁よりも種々其の弊を諭され、此の浴場の旁に警察の交番所などもあれど、愚民更に従はず、此の熱ならでは効なしとし、（略）甘んじて此の危厄を踏めり。（略）此の熱の湯は市街の中央湯垣の西北路旁にあり。（略）早朝浴場を開かんとする時、隊長先出でて湯の差口を塞ぎ柝を撃ちて人を呼べば、市中遠近の旅店より浴者皆来り集る。其体を見るに身の内皆爛れて陰部殊に甚しく、皆綿などあててあり（略）皆よろ〳〵と歩む。男女裸体となり打交り騒がしく入り立つ。初め各一枚の板をとり湯槽の四辺に立ち、声立てて湯をかきまぜて熱を殺ぐ。これを湯を揉むといひ板を揉板といふ。揉む事凡十分間許にして隊長掌を鳴らして止むれば、長き板を数枚槽の上に亘し皆板の上に蹲まり、柄の短き柄杓にて皆俯して頭部に熱湯を汲み上げ〳〵注ぐ。初めに斯くして後に入らざれば、体のみ熱して眩迷すと云。頭に注ぐ事凡三百盃程なるべし、皆頭も面も真赤になりて煤（ゆ）であげたるが如し。隊長又柄杓にて槽の舷を叩けば皆湯に入るの装を為す。弱き者、新参の者は足袋をはき、又は肩身に布など纏ひ皆揃ひて、板に両手を突き張り足よりそろ〳〵と入るなり。入る時に隊長声をあげて「三国一の名湯――」といへば皆異口同音に「有り難い」と和す。隊長を首として（略）一同身動きもせずして沈む。（略）沈み居る間は凡二三分間許にして隊長、「暖つたらそろ〳〵出やう」――余は煤（ゆだ）つたらの誤りなるべしと思へり――といふを合図に一同我先にと跳ね出づ。其熱き事如何ぞやと思ふばかりなり。余が見たる時は、此一度に入りたる者凡五六十人許なり。（略）盛なる時は此浴場の四辺に三百人も集ると云。最初に入るを一番と云、次なるを二番、三番と云。二番の群よりは湯を揉まず直に頭に注ぎ入るなり。四番程にして止ぬ。婦人は多く二番三番に入る。（略）斯くすること一日に五六度なりと云。（略）熱湯に沈む間に堪へず、又一人先出づる事能はずして遂に眩して斃るる者あり。斃るれば「アガツタ」といひ一同に板の間の上へ引き上げ、水注ぐ。蘇する者は蘇し、体弱き者は遂に死ぬるもあり。実に此の熱の湯の現状を見て、余、田中君と且驚き且呆れ醜臭野蛮残酷、亦これに超ゆるもの無かるべし。

田山花袋（一八七一～一九三〇），一八九三（明治二六）年，一八九七（明治三〇）年，一九一八（大正七）年に訪問

田山花袋「草津」『一日の行楽』博文館、二七四～二七六頁、一九一八年

温泉の湧出量の盛んなのでは、草津は日本にもめづらしい。まア、此処と別府温泉とが日本での両大関である。（略）

草津は高原の上に位置してゐて、海抜も三千尺以上である。従つて夏は涼しい。確か蚊もあまりゐなかつたと覚えてゐる。唯、遠い山の中にあるので、交通が甚だ不便だ。（略）沓掛から、浅間の凹処を越して六里ヶ原を通つて、鳥居峠の街道に出て行くのが一番近いが、これでも十二三里はあると思ふ。

昔の人々は、ゆつくりした気分で、この遠い山を越えて、その温泉に五十日も六十日も滞在してゐたらしい。従つて、今よりも却つて昔の方が、草津は栄えた。あらゆる娯楽の方法も整つてゐたらしく思はれる。癩病患者なども大変に行つた。

草津には、大きな旅館が庇を並べてゐる。皆な二階三階建てゞある。町中には熱湯が流れてゐて、湯気は凄じく立つてゐる。烈しい温泉といふことを誰も感ぜずにはゐられまい。それに、硫黄泉の烈しい臭が町中に漲つてゐる。女などには余り向かない温泉である。（略）こゝで有名なのは、例の熱の湯で、一時間以上もかき廻して、そして軍隊的組織で、一斉に入つたり出たりするのがある。頗る奇観である。

兎に角、草津は一度は行つて見るべき温泉場である。十月以後は、戸を閉ぢて了ふやうな温泉場である。

田山花袋『温泉めぐり』博文館、一一八～一二二頁、一九一八年

草津は昔からきこえた温泉場だけあつて、感じがわるくなかつた。想像してゐたのとは違つて、何方かと言へば、ひらけた広濶とした位置にあるけれども、またその展け方が伊香保や箱根の強羅あたりとは違つて、高原の上にありながら平野の中にあるやうな気がするけれども、それでも高燥な気があたりに漲つて、有馬とか、道後とか、城の崎とかいふ温泉のやうな世間に近い感じはしなかつた。開けたやうで、そして何処か山の中といふ感じを持つた温泉であつた。

草津の全盛期はしかし今ではなかつた。今よりは却つて昔の方が栄えた。（略）それと言ふのも其処に来る浴客は、少くとも五十日や六十日はそこに淹留する準備をして、遠い山路を五日も六日もかゝつてはるばるやつて来るのであるから、何うしても今のやうに一夜泊つて翌朝すぐ立つて行くやうな客とは、客としての気分が違ふ。娯楽の機関も従つて発達すれば、諸芸人も多く遠くから入り込んで来るといふ形で、おのづから金も沢山に落ちた。（略）

しかし、今とて、草津は決して衰へた温泉場ではない。浴舎も三層二層相連るといふ風で、設備はかうした遠い山の中とは思はれないほどすぐれてゐる。それに、湯が烈しくつて好い。道後や、有馬や、城の崎のやうなあんな衰へた温泉ではない。また伊香保、塩原、箱根のやうな女性的な温泉ではない。飽まで男性的である。（略）ちよつと行つただけでは、余りに烈しすぎるので、気味がわるくなる位である。（略）

はやし生（経歴不詳）一九二七（昭和二）年早春

はやし生「草津への旅」『旅』一九二七年四月号、七二～七四頁

草津の町に着いた。此の附近の運動の茶屋も、草津節の、（送りませうか、送られませうか、せめて運動の茶屋迄も）に歌はれて居る様に昔から随分多くの、悲喜交々の、ローマンスを残して居り、冬はスキーマンに嬉ばれる、好スロープになつて居る。

漸く解放された様な気持で、外に出ると、此の様な山奥に良くこんな大きな家が沢山あつたもんだ、行かぬ先は随分辺鄙な所と思つて居たのが、以外（ママ）に賑やかなので驚かされた。

我〻同行二人の洋服巡礼は、少しも優雅な所がなく、大股で歩きながら湯畑のそばの、N館に這入つて行く、「いらつしやい」と云ひながら、白い？手を付かれて、いゝ気持になり、座敷へ案内されて、「どうぞ御風呂に」と云はれるので、早速飛込んで行つた処、誰も居らぬので、いゝ気持で這入つてた。すると後から来た人が、そばにあつた、柄杓で二三十回も、湯を頭へかけて居る、「おい変な事をする人だぜ」「ウム」と二人共其の様子を見詰めて居る、そのうち御免なさいと云ひながら這入つて来たので「一寸御伺ひ致しますが、どうして湯を頭へかけるのですか」と聞くと、我〻を新米とみて丁寧に教へて来れた（略）。（略）こんどは廊下を通る女中に「おい、ねえさん今日汽車で真黒になつたから石鹸を貸して呉れ）と云ふと、女中の奴笑ひながら此の湯で石鹸を使ふと、皮膚が黒くなつてしまうとの返事で、仕方なく其の儘出て来た。

湯上の気分の良いので、すつかり腹の空つたのを忘れて居たが、良く考へると未だ昼飯前だ、食後散歩に出て、夕べの草津をぶらり〳〵。中春とは云ひながら、未だ附近には、純白な雪が、大部残つて居る、左の方には、白根の山が、慈母の如く立ち、前には湯畑の噴湯が、間断なく、湧き出る、草津の町より、他に出た事のない者は、川と云ふのは、湯が流れて居る処だと思つて居る位ゐだ。慈まれたる草津の町、夏は避暑、冬はスキーに、常に客の絶間がない、交通の便が開けての今日草津は療養の草津ではなく、遊覧の草津と変つて来た、東京を終電車に、出ると午前の十一時には草津の湯に這入る事が出来る。（略）

其の内何処からともなく、大勢集まつて歌ふ声が聞へて来るので行て見ると湯屋だ、看板には熱の湯と書いてあるので一寸と驚く。大勢が裸体で長い板を持つて湯を揉みながら草津節を歌つて居る。其の内湯長が命令で一同静かに湯に這入る、（略）「サア、宜ければ上れ」の号令がかゝると、今迄の静かだつた湯が、猛りだして皆んな脱兎の様に飛出す景は、一寸想像が付かぬ。

そろ〳〵寒くなつて来たので宿に帰り、早速失敗せぬ様、一風呂浴び来る。

地下からは湯川の流れの音が響いて来る、外からは、切々の思ひを三すじの糸に、含めた余音が聞えて来る。遠く山川越へて来た客との別れを悲しむ様だ。静なる山間の温泉、それは身も心も洗ひ落せる様だ。

高原の温泉、落葉樹の林、総てが、我〻都会人には親しみ易い場所である。